

# 教職実践演習の研究

## —幼稚園教諭養成課程における実践例の分析と展開—

福山多江子・生野 金三・高木 史人・香田 健治・伊澤 永修

### I はじめに

平成18年に中央教育審議会が「今後の教員養成・免許制度の在り方について」といった課題のもとに教員養成の具体的方策について答申を発表した。それは「教員としての必要な資質能力の最終的な形成と確認」という項において、

教員としての最小限必要な資質能力の全体について、確実に身に付けさせるとともに、その資質能力の全体を明示的に確認するため、教職課程の中に、新たな必修科目（「教職実践演習（仮称）」を設定することが適當である<sup>(1)</sup>。

としている内容である。その教職実践演習は平成22年度より新設科目として教職課程の中に位置付けられた。その教職実践演習をめぐって、

教員として求められる4つの事項（①使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項②社会性や対人関係能力に関する事項③幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項④教科・保育内容等の指導力に関する事項）を含めることが適當である<sup>(2)</sup>。

としている。

①には、「誠実、公平かつ責任感を持って子供に接し、子供から学び、共に成長しようとする意識を持って、指導に当たることができるか。」「子供の成長や安全、健康管理について配慮して、具体的な活動を組み立てることができるか。」等の内容が含まれる。②には、「挨拶や服装、言葉遣い、他の教職員への対応、保護者に対する接し方など、社会人としての基本が身についているか。」「保護者や地域の関係者の意見・要望に耳を傾けるとともに、連携・協力しながら、課題に対することができるか。」との内容が含まれる。③には、「気軽に子供と顔を合わせたり、相談に乗ったりするなど、親しみを持った態度で接することができるか。」「子供の声を真摯に受け止め、子供の健康状態や性格、成育歴等を理解し、公平かつ受容的な態度で接することができるか。」「社会状況や時代の変化に伴い生じる新たな課題や子供の変化を、進んで捉えようとする姿勢を持っているか。」「子供の特性や心身の状況を把握した上で学級経営案を作成し、それに基づく学級づくりをしようとする姿勢を持っているか。」等の内容が含まれる。④には、「自ら主体的に教材研究を行うとともに、それを活かした学習指導案を作成することができるか。」「教科書の内容を十分に理解し、教科書を介して分かりやすく学習を組み立てるとともに、子供からに質問に的確に応えることができるか。」「板書や発問、的確な話し方など基本的な授業技術を身に付けるとともに、子供の反応を生かしながら、集中力を保った授業を行うことができるか。」「基礎的な知識や技能について反復して教えたり、板書や資料の提示を分かりやすするなど、基礎学力の定着を図る指導法を工夫することができるか。」等の内容が含まれる。

教職実践演習は、これらの資質能力を確実に身に付けさせるとともに、その資質能力の全体を明示的に確認するための科目である。これらの資質能力の確認の方途として中央教育審議会の答申では、

役割演技（ロールプレーイング）やグループ討論、事例研究、現地調査（フィールドワーク）、模擬授業等を取り入れることが適当である<sup>(3)</sup>。

と指摘する。ここでは、教職実践演習において模擬授業を導入するとしているが、これは単元観、教材観、幼児児童生徒観、教育観、授業観（指導計画）等を基盤とした授業づくり（保育計画）より授業実践（教育の実際）に至る実践的指導力の基礎の育成についてはしっかりと体得せしめるということである。授業づくり（保育計画）とは、教材研究、指導案・板書計画・発問計画・作業のプリント・教材づくり等の作成等のことであり、これらを基盤に実践を試み、将来実践の場で柔軟に活用できる力量を体得させることを教職実践演習では願っているのである。

以上のことと踏まえ、本研究では、教職に関する科目において、受講者である学生が模擬保育（部分指導案作成も含む）や模擬遠足等において、指導案を作成したり、幼児に関わったりし、その振り返りを通して、教員に求められる資質・能力（教材観、幼児観、指導観等の保育観）が如何に高まったのかを探ることを目的とする。

## II 【実践1】東京成徳短期大学での事例

### 1. 教職実践演習の授業の様相

学生の課題意識を明確化し、教育現場で必要不可欠な知識や能力を育成することを目的に本学では授業構成をしている。学生には、幼稚園教諭免許を付与するに十分な資質能力を身に付けているかどうかを最終評価する場であることを自覚させ、主体的に取り組むことが重要であることを伝えている。

この目的から、15回の授業を設定している。大まか授業内容は、以下のとおりである。

- |        |  |
|--------|--|
| 第1回目   | ガイダンス（教職実践演習の意義や受講態度、これまでの学修の振り返り、教員としての心構え）                           |
| 第2回目   | 社会人としてのマナー   |
| 第3回目   | 社会性・対人関係の築き方   |
| 第4回目   | 自己課題の発見と主体的解決  |
| 第5回目   | 教員の意義・保護者の役割   |
| 第6・7回目 | 幼児理解1・2（外部講師による）   |
| 第8回目   | 近隣の協力による園見学  |
| 第9回目   | 第6・7・8回の振り返りレポート作成   |
| 第10回目  | 保護者理解・異文化理解  |
| 第11回目  | 幼児理解について   |
| 第12回目  | 指導案作成アップチーム<br>幼児理解・保護者理解アップチーム<br>文章表現力アップチーム<br>表現力アップチーム（音楽表現・造形表現） |
| 第13回目  | 第12回目と当チームでの受講   |
| 第14回目  | 教員として望まれること  |
| 第15回目  | 教員としての学びのまとめと今後の抱負   |

（東京成徳短期大学教職実践演習 平成●●年度授業計画）

第1回目の段階で、学生自身にこれまでの実習やの振り返りを行ってもらい、この科目に向けての自己課題を記入してもらうことを行う。

第12回・13回は、これまで学修を行ってきた振り返りから、学生自身が弱いと考える授業内容を選択し、そのクラスに移動し、講義を受講する形をとっている。

15回全て受講を終了した時点で、自己診断を行い、克服した課題とそうでない課題などを明確化し、それを記入しこれから卒業までに主体的に行わなければならないことを考えさせ、教員になるための自覚を促している。

## 2. 教職実践演習の授業前の学生自身の課題

教職実践演習を授業するに当たって、以下の課題を学生自身が挙げた。以下、列挙する。

### \*社会人としての課題

- ・マナーや礼儀を身に付ける
- ・言葉遣いに留意する
- ・幼児を預かる責任感を自覚する

### \*人との関わりに関する課題

- ・教員として幼児との適切な関わりを持つ
- ・保護者に対して適切な対応・助言をする
- ・幼児への個々の発達段階や状況に応じた言葉かけを行う

### \*指導技術に関する課題

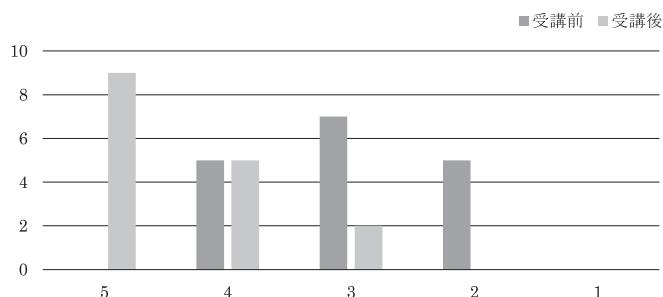
- ・指導案を確りと立案する
- ・幼児教育に関する豊富な知識を身に付ける
- ・状況に応じた臨機応変な対応をする能力を修得する
- ・ピアノ等の表現技術を修得する
- ・手遊び等の実践的な技術を修得する
- ・絵本の読み聞かせなどの指導技術を修得する
- ・素話や語り聞かせの技術を向上させ話のレパートリーを増やす

### \*新しくなった幼稚園教育要領を確実に学ぶ

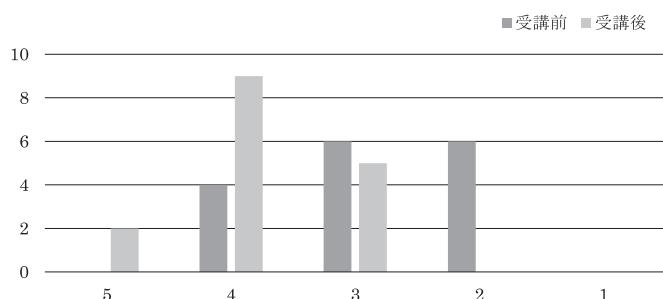
この授業では、学生が受講前と受講後とではどのような成長を自覚したかを知るために、以下のアンケートを行った。これは学生による自己評価を数値化したものである。なお、表中の「○をつけた数」とは●●●●●●●●●のことである。

これまでの学習・実習体験を踏まえての自己評価項目	受講前の評価	受講後の評価
① 教員としての自覚・使命感・責任感に対する認識	5・4・3・2・1	5・4・3・2・1
○をつけた数	0・5・7・5・0	9・5・2・0・0
② 社会人としての社会性や礼儀。マナーの獲得、人としての協働・協調性	5・4・3・2・1	5・4・3・2・1
○をつけた数	0・4・6・6・0	2・9・5・0・0
③ 指導案作成・教材教具の準備、指導技術の獲得	5・4・3・2・1	5・4・3・2・1
○をつけた数	0・5・8・1・0	1・7・7・1・0
④ 総合的にみた教職への意欲・適性・向上心	5・4・3・2・1	5・4・3・2・1
○をつけた数	0・6・7・3・0	6・6・4・0・0

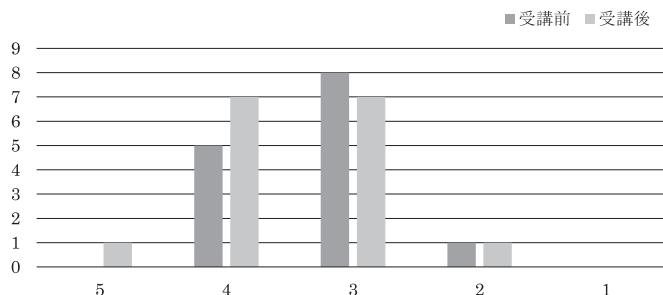
(東京成徳短期大学履修カルテより)



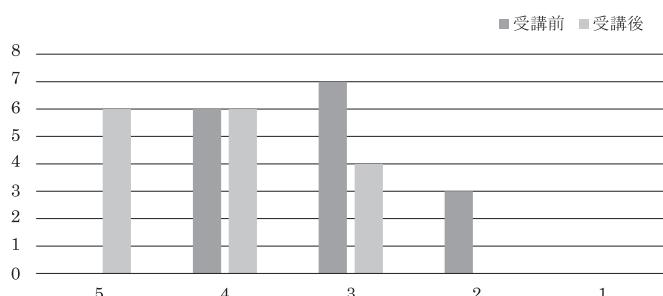
幼稚園教諭としての自覚・使命感・責任感に対する認識



社会人としての社会性や礼儀・マナーの獲得、人としての協働・協調性



指導案作成・教材教具の準備、指導技術の獲得



総合的ぬみた保育職への意欲・適性・向上心

## ●授業後の成果

### ① 教員としての自覚・使命感・責任感に対する認識

授業後、学生からは次のようなことを自覚したと、今までの学修の成果の内容が寄せられた。＊印部分がそれぞれの状況であり、・が成果（新たに得られた知見）である。①から④までの項目について順に紹介する。

\*園見学に行って

- ・現場での教員や保育者の動きや接し方を学んだ

⇒教員は、子ども一人一人を確りと見て関りながら対応していた。教員の笑顔の奥には責任感と守らなければいけないという気持ちを感じられた。教員は、子どもの目線に立って一人一人を援助していた。

\*授業で学んだこと（幼稚園長から幼児理解についての講話を聞いて）

- ・子ども理解について学んだ

⇒子どもの行動には意味があり、その思いに寄り添い、対応や見守りをしなければならないということを学んだ。そのためには子どもとの信頼関係を築くことが重要である。それにより個人差や個性を見つけることができる。その子どもが達成した時には、一緒になって喜ぶことのできる関係になる。幼児理解ができると、指導案も書きやすくなる。

- ・保護者対応について学んだ

⇒子どもが怪我をしたときの保護者への対応様々な保護者がいるが、伝え方や対応方法は同じにすることが大切である。問題が起きるまでの経緯やそのあとの子どもの様子など、順序良く話すことが重要。

### ② 社会人としての社会性や礼儀、マナーの獲得、人としての協働・協調性

- ・社会人としてのマナーを習得する大切さ

⇒新人の間は、自分より経験値の高い先輩の教員に囲まれているので、様々なことを吸収できる反面、社会人としてのマナーや園でのルール等には十分に留意して動かなければならないため、社会人としてのマナーは非常に重要である。

- ・コミュニケーションの大切さ

⇒誰とでもよくコミュニケーションをとり、分からることはそのままにせずに、質問をする。保護者には子どもたちについて頻繁に連絡を行い、様子を話すことが大切である。自分の意見を相手に伝えるだけでなく、相手の意見を聞き、こんな考え方や意見もあるのだと視点を変えて考えることも重要であるため、このような形でコミュニケーションをとり、よりよい意見を出すことも必要なスキルである。

### ③ 指導案作成・教材教具の準備、指導技術の獲得

- ・指導案について

⇒「ねらい」と「内容」の設定の仕方について。子ども達の様子を見て、その様子から子どもたちにどのようなことを教員として体験してほしいのか、どのように育ててほしいのかという考えをまとめておくことも必要である。どのような準備をした

ら子どもの遊びが広がるかを考えることも指導案の一つのポイントである。そのためには子どもの好きな遊びを観察したり前日の子どもの様子と関連付けたりすると良い。

#### ④ 総合的にみた保育職への意欲・適性・向上心

- ・新しい教育要領と指針

⇒10の姿というのは、今すぐ子どもができるものではなく、積み重ねによるものであり、日々が大切である。

幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿を知ることで、子ども一人一人の知識や技能、思考、判断、表現力など個々に合わせた関わり方をすることも保育者として大切な課題である。子ども全員に同じレベルを求めるのではなく、子どもの特徴を知ってからその子自身が成長できる範囲を決めて接していくことで少しづつ何かを学ぶことができる。

#### \* 今後の課題

更に学生からは今までの学修の成果の自覚によって、以下の点をさらに補う必要があるとして、新たな課題が設定されるようになった。

- ・指導技術について

- ・ピアノを弾く技術
- ・絵本や紙芝居の読み聞かせ
- ・パネルシアター・エプロンシアターを演じる演技
- ・パネルシアター、エプロンシアターの作品の製作
- ・素話が上手にできるようにする
- ・手遊びのレパートリーを多くし、時間の調節のために臨機応変に行えるようにする
- ・指導案作成をより短時間で充実したものが書けるようにする

### 3. 考 察

まず、数字上から考察すると、①教員としての自覚・使命感・責任感に対する認識識、②社会人としての社会性や礼儀、マナーの獲得、人としての協働・協調性、③指導案の作成、教材教具の準備、指導技術の獲得、④総合的にみた教職への意欲・適性・向上心の4つの項目すべてにおいて教職実践演習の受講前と受講後とでは学生自身の評価が高くなり、成果が見られたことが分かる。学生たちは、この授業において教員としての自覚が芽生え、社会人としての社会性や礼儀、マナーを獲得している。総合的に見た意欲の項目に関しても2の評価がなくなり、3以上の数字が記入されている。

ただし、③の指導案作成・教材・教具の準備、指導技術の獲得においては、1名が2の評価を記入していた。この項目に関しては、授業の形態が異なり、学生自身が最も苦手とする分野を選択し、そのグループを受講しているため、本人自身の課題が多数あるものに関しては、十分な時間が取れず、学びが不十分であったと推察される。③の項目に関しては、非常に個人差が出る項目である。このことは、自由記述の中でも学生が記入しており、これから4月の社会人になるまでの間に、手遊びやパネルシアター、エプロンシアター、絵本の読み

聞かせ、ピアノなどの技術を身に付けたいと、今後の課題において記入している。

このことは逆に言えば学生自身の教員としての自覚がより芽生え、自己課題の問題点の分析が明白になった表れであるといえよう。以下、学生が記入した授業への感想を引用しながら、学生の成長の様相を具体的に紹介する。

①の教員としての自覚・使命感・責任感に対する認識も、幼稚園見学の際の学生の観察は、教員の動きをより細やかに見ており、子供一人一人に対しての対応の仕方の違い、全体を見渡しての教育の流れを読み取ることができている。これは、

子供一人一人を見てしっかりと対応していた。教員の笑顔の奥には責任感と守らなければならないという気持ちを感じられた。教員は子供の視点に立って一人一人を援助していた。

という学生の記入から読み取ることができる。これは、実習としてではなく幼稚園見学を行うことにより、気持ちに余裕があること、時期的に幼稚園や保育所の実習がすべて終了しているため、学ぶ視点が明確になり教員の動きを見ることができているためであろう。ここからも学生の教育観が確実に形成されていることも窺える。

また子供理解に関しても幼稚園長の講話を聞く中で、子供の行動に関して記している。

子供の行動には意味があり、その思いに寄り添い、対応や見守りをしなければならないということを学んだ。そのためには子供との信頼関係を築くことが重要である。それにより個人差や個性を見つけることができる。その子供が達成した時には、一緒になって喜ぶことのできる関係になる。

という学生の記入からは、子供の視点に立つことや子供の立場に立つことの具体的な意味が理解できたのではないかと推察される。単にその子供の気持ちや行動から手を出すことが援助なのではなく、子供の主体的な発達を期待して見守ることも重要な援助のだという理解にまで発展していることが読み取れる。

保護者対応に関しても、様々な保護者がいるが、同じ問題に関しては伝え方や対応方法は同様にすることが大切である。問題が起きるまでの経緯やそのあとの子供の様子などを順序よく話すことが必要である。

という学生の記入からは次のように読み取られる。日ごろから親身に一人一人の保護者に対応することは当然であるが、問題が起きたときに、その経緯を時系列に沿って詳細に説明することの重要性や、そのあとの子供たちの様子を親身になって話すことで、信頼関係も築いていくことができるなど、教員としての保護者に対する対応も臨機応変に親身に接することの大切さを、この学生は理解している。

②の社会人としての社会性や礼儀、マナーの獲得、人としての協働・協調性に関しても、

新人の間は、自分より経験値の高い先輩の先生に囲まれているため、様々なことを吸収できる反面、社会人としてのマナーや幼稚園でのルール等には十分に留意して動かなければならぬため、社会人としてのマナーは非常に重要である。

という記入のように、社会人としての自覚が芽生えていることが理解できる。引用に「幼稚園でのルール」とあるように、幼稚園ごとに教育目標や規則・慣習等があることがあるわけで、学生が個々の教育観を持っていたとしても、その組織の教育目標等を確りと理解しながら加えて自分自身の教育観を確立していく必要があることが理解できたからこそ、上記引用のような言葉が出て来たのであろう。

また社会人として今までそうであるが社会に出るとますますコミュニケーションが重要なってくることも次の引用の文章から読み取ることができる。

誰とでもよくコミュニケーションをとり、分からることはそのままにせずに、質問をする。保護者には子供について緊密に連絡を行い、様子を話すことが大切である。自分の意見を相手に伝えるだけでなく、相手の意見を聞き、こんな考え方や意見もあるのだと視点を変えて考えることも重要であるため、このような形でコミュニケーションをとり、よりよい意見を出すことも必要なスキルである。

この記入から、教員は必要な事項については教員や保護者に適切に報告をし、共通理解を行う必要がある。そのコミュニケーションの重要性を理解し、我意を押し通すだけではなく、相手の意見にも耳を傾け、柔軟な対応を行うことが大切であると学生が自覚できたものと推察できる。

### ③の、指導案作成・教材教具の準備、指導技術の獲得においても、

「ねらい」と「内容」の設定の仕方について学ぶことができた。子供の様子を見て、その様子から子供にどのようなことを教員として体験してほしいのか、どのように育ってほしいのかという考えをまとめておくことも必要である。どのような準備をしたら子供の遊びが広がるかを考えることも指導案の一つのポイントである。そのためには子供の好きな遊びを観察したり前日の子供の様子と関連付けたりすると良い。

という学生の記入から、指導案作成のポイントというものが、前日の子供の姿から「ねらい」や「内容」を設定し、そのためにいま子供はどんな遊びに興味関心を示すのか、子供の様子をよく観察することが重要だと認識されたことが分かる。そうして、そのためにどんな準備を行って環境設定をしたら良いかを考え、文章化する必要がある。教員として子供に体験してほしいこと、育ってほしいことをまとめ、「ねらい」や「内容」を文章化すべきだという理解が見て取れる。

④の総合的にみた教職への意欲・適性・向上心においても、今年度から施行された幼稚園教育要領の10の姿を理解し、それが重要である事も記入されている。また、①～③の項目にあるように、この授業を受講することで、教員としての課題の視点が明確になり、それに対してどのような解決をしたかということも具体的に記入されている。

このように教職実践演習の授業を通して学生たちは、教員になるにあたり、自分自身の得手不得手を明確にし、それに向かって問題解決をするべく授業を受講し、殆どの点においてそれを克服したようである。これに伴い、学生自身の教育観や幼児理解、指導観がより具体的になっていることがうかがえる。それに加え、教員になる意欲も増加し、これから4月までの課題も具体的に設定できている。子供一人一人の知識や技能、思考、判断、表現力など個々に合わせた関わり方をすることや、子供全員に同じレベルを求めるのではなく、子供の特徴を認知し、その子自身が成長できる範囲を決めて接していくことで子供一人一人を学ぶことができるという学生の認識により、教職実践演習の学びの成果が窺えるのである。

## 【実践2】新渡戸文化短期大学での事例

### 1 研究の目的

授業科目「教職実践演習」においては、前述の如く教員として求められる資質・能力には、四者の内容が掲げられている。模擬遠足の設計と実践においては、就中①の「使命感や責任

感、教育的愛情等に関する事項」と②の「社会性や対人関係能力に関する事項」等の資質・能力の様相を探ることを目的とする。前者の①の内容としては、「子供の成長や安全、健康を第一に考え、適切に行動することができる。」という到達目標と目標到達の確認指標例の「子供の成長や安全、健康管理に常に配慮して、具体的な教育活動を組み立てができるか。」を中心据え、一方後者の②の内容としては、「教員としての職責や義務の自覚に基づき、目的や状況に応じた適切な言動をとることができる。」「組織の一員としての自覚を持ち、他の教職員と協力して職務を遂行することができる。」という到達目標と目標到達の確認指標例の「他の教職員の意見やアドバイスに耳を傾けるとともに、理解や協力を得ながら、自らの職務を遂行することができるか。」「学校組織の一員として、独善的にならず、協調性や柔軟性を持って、公務の運営に当たることが出来るか。」等を中心据えて、資質・能力の育ちの様相を考察していくことにする。

## 2 模擬遠足の設計と実践をめぐっての振り返り

以下の内容は、受講者である学生がグループ毎に模擬遠足の指導計画を作成し、その実践を試み、それを基に指導計画及び実践等について振り返ったものである。

### ●子供の成長や安全、健康を第一に考え、適切に行動することができる。

受講者 S	自分たちで企画や運営を実践を行い、考えて実行させることの大変さを感じました。子どもの年齢に合わせて、距離や移動時間を考えながら適切な場所を選ばなくてはならないと感じました。決められた時間のなかで保育を展開させること、余裕を持って行動すること等の大切さを学びました。私たちは、時間に余裕を持って行動していたため、当日の電車の遅延があっても予定とあまりずれることなく行動することができました。
受講者 S	子供がどこに行ったら楽しむことができるのか、また園児でも疲れることなく楽しむことができる場所はどこだろうかと、子供の立場に立って考え、企画することができました。また、当日のスケジュールもしっかり考え、楽しむための時間配分も考えながら模擬遠足を実践することができたと思います。これまで、自分から企画し、提案したり、意見を述べたりすることは苦手でしたが、今回の模擬保育では自分がもし保育士になつたらどうするかという考え方、熱心に積極的に取り組むことができました。
受講者 F	今回模擬遠足では、グループの話をまとめ、そして子供の発達や体力、子供の歩くペース等を考えながらまず企画しました。その際、時間に余裕を持って行動することができるようになることが大切であるということに気付きました。運営は、企画したことを基に臨機応変に対応し、見通しをもって行動することができるようになりました。また、次回は今回より良いものになるように、振り返りをし、「ここはこうしたらよかった」などと反省点をあげておくことが大切であるということに気付きました。
受講者 K	行事は、もともと好きで参加していたが、今回は教員として最初の計画から実践までを行った。企画の面ではグループの人と「子供に何かを経験させる場所」を調べて、その中からさらに自分たちが思う理想の保育できる場所を絞った。私自身は子供と遠足に行く場所としてふさわしいところ（トイレの有無、その場所までの交通、その場所の広さ、その場所へ行く人たちの年齢層）を調べて案を出し、参加することができた。運営の面では、グループで協力し合い、子供を引率しているということを意識しながら行動することができた。例えば、車の通らないところを歩いたり、今何列で歩けば安全なの

かを考えたり、駅でエスカレーターでなく階段を使ったりということである。また、実際に子どもたちに体験して思うことを私自身が体験したり、また食事をすると予定していた場所でシートを敷いて食べてみた。これらのことから自分が中心となって行事を遂行する際のスキルは、少しはあるが身に付いたと思う。また、グループの人と協力し、子供の目線で遠足をたのしむことができた。

これは、企画や運営に関する内容である。その様相を一覧するとき、まず気付くことは子供の成長や安全を配慮して具体的な模擬遠足を構想していることである。具現すれば、「子供の年齢に合わせて、距離や移動時間を考えながら適切な場所を選ばなくてはならないと感じました。」(受講者S)、「子供がどこに行ったら楽しむことができるのか、また園児でも疲れることなく楽しむことができる場所はどこだろうか」(受講者S)、「子供の発達や体力、子供の歩くペース等を考えながら」(受講者F)、「トイレの有無、その場所までの交通、その場所の広さ、その場所へ行く人たちの年齢層」(受講者K)、「車の通らないところを歩いたり、今何列で歩けば安全なのかを考えたり」(受講者K) 等がそれに相当する。他者と共同して保育を企画・運営・展開するに当たって重要なことは、まずもって幼児の実態に鑑み、幼児の特性や状況に応じた対応の方法を体得しておくことである。このような把握の観点より受講者である学生の模擬遠足の振り返りの様相に目を転じてみると、「子供の年齢に合わせて」「子供の立場に立って」とあるように子供観に鑑みた指導観が認められ、保育観の育ちの一端を垣間見る思いがする。教職実践演習の授業においては、「教員としての必要な資質・能力の最終的な形成と確認」を模擬授業を導入して形成し確認するとしている。ここでいう資質・能力とは、言うまでもなく実践的指導力である。この実践的指導力は、指導者である教師の単元観、題材観、教材観、子供観、指導観等の保育観が基盤となっている。

### ●組織の一員としての自覚を持ち、他の教職員と協力して職務を遂行することができる。

受講者M	個々でそれぞれ係を分担し、役割を果たすことで子供がより安全な環境で活動を行うことができると思いました。また、自分の係の仕事の他に他の人の係の仕事を協力しておこうことで、教員同士の信頼関係を築くきっかけになると思いました。
受講者T	他者と連携・協力する力に関しては、他者と関わることではぐくまれる一体感や協力するときにも相手を思いやる気持ちがより芽生えたと思います。このように自分以外の他者をお互いが意識して思いやりを持つことで、より集団活動が活性化することに気付きました。したがって、教員としてお互いの信頼関係を築いて保育士同士の連携がスムーズに行うができるようにしたいと思いました。
受講者T	模擬保育を行う前にそれぞれ役割を決めていましたが、実際現場ではその人を中心のみんなで調べたり、お金を計算したり、記録をしたりしていたのでとてもチームワーク良くできたと思いました。また、今回の模擬遠足でそれが自分の得意な分野を把握し、役割分担が出来ているなあと思いました。一人に頼らず、みんなで協力し情報を常に共有することが本当に大切であると思いました。
受講者S	幼稚園名から人数、年齢など最初の段階からグループで考えるので、自分達の考えた計画で実行する楽しさ、大変さ等を味わうことができ、最後に達成感を味わい、と同時に団結力の大切さも学びました。模擬遠足を行う前に一人ずつ係を決めましたが、全員が協力して行動したからこそ成功したのだと改めて感じました。最初は、場所を決めか

	らポスター作り、時間配分など、不安なことがありました。当日が上手くいくのか、場所の選定ミスはないか等前日まで不安に思うことがありました。しかし、当日は一人一人が時間を確認しながら行動し、声掛けしながら行動することができ、楽しく学ぶことができました。
受講者 S	多くの先生方がいてそれぞれの考え方や意見も異なる点がある中で、お互いに意見を出し合ったり、他者の意見に共感したり、良い意見を取り入れたりしながら企画していくことが大切だと思いました。今回の模擬遠足では、そうしたことを意識して、自分も他者の意見を尊重しました。グループで行うことによって、多くのアイディアがあることも改めて考えさせられ、多くのことを学び、班の皆さんと協力して取り組むことができました。自分の意見だけを主張するのではなく、他者の意見もよく聞き、いろいろなアイディアを知っておくのも大切なことだと知りました。
受講者 S	私は、今まで授業内でグループディスカッションなどをした際、なかなか他者の意見が出てこないとき、一人で意見を出し、それを話してしまうことが多く、グループとしての意見をまとめることができませんでした。そのことを踏まえて、今回の模擬遠足では、自分の意見だけでなく、他者の意見も聞いたり、取り入れたりしながら、全員の意見をまとめることを意識しました。全員の意見を聞くことで、自分には思い浮かばなかった発想に気付きました。
受講者 S	自分自身の物事を捉える視点も広がりました。また、副主任として、一の作業をするときに、いくつかの工程があるとき、それぞれ一人一人に役割を分担し、相互に連携しながら効率的に作業を進めることができました。初めての経験でしたが、今回スムーズに作業を進めることができたので、自信をつけることができました。
受講者 Y	幼稚園の中で役割を決めていざ実行するとなったとき、一番大切なのがお互いの信頼関係と一人一人が協力的子どものことを考えているかということである。時間が迫っているとき、私は一人一人の意見を押し付けるのではなくみなで考え、簡潔にまとめあげることが大切であると思った。最初は、どうしようと考えてしまっていたが、まわりと協力しなければならないということを、メンバーから学びました。実際に教員となったときは、教員同士の連携が子供の支えにつながることを実感しました。

これは、他者との協力に関する内容である。その様相を一覧するとき、まず気付くことは他者と協力して課題に取り組ことの重要性を指摘していることである。具現すれば、「自分の係の仕事の他に他の人の係の仕事を協力しておこうことで、教員同士の信頼関係を築く」(受講者M)、「他者と連携・協力する力に関しては、他者と関わることではぐくまれる一体感や協力するときにも相手を思いやる気持ちがより芽生え」(受講者T)、「教員としてお互いの信頼関係を築いて教員同士の連携がスムーズに行うことができるよう」(受講者T)、「みんなで協力し情報を常に共有することが本当に大切」(受講者T)、「同時に団結力の大しさも学び……全員が協力して行動したからこそ成功した」(受講者T)、「班の皆さんと協力して取り組む」(受講者S)、「自分の意見だけでなく、他者の意見も聞いたり、取り入れたりしながら、全員の意見をまとめることを意識」(受講者S)、「互いの信頼関係と一人一人が協力的で子供のことを考えて」(受講者Y) 等がそれに相当する。受講生である学生は、他者と連携・協力することによって信頼関係の構築ができたり、思いやりの気持ちが育まれたり、成功に導くことができたりと指摘する。ここでは、模擬遠足に向って、グループ毎に率先して役割を遂行したいという気持ち、と同時に他者の意見を受容しようとする姿勢が構

築させているからであろう。こうした資質・能力は、教職実践演習で重要視している「社会性や人間関係能力に関する事項」に内包される。

### III おわりに

以上、「教職実践演習」という科目における教育のねらいを概観した上で、その教育実践の2つの事例の紹介と分析を行った。本稿冒頭でも紹介した、教員の資質・能力として求められる4つの事項、すなわち、

- ①使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項
- ②社会性や対人関係能力に関する事項
- ③幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項
- ④教科・保育内容等の指導力に関する事項)

が教職実践演習という科目の中でどのように学生に自分自身の課題として自覚され、問題が深められ、広げられていくかについて、ここでは幼稚園教員養成課程の学生への実践例を中心見たわけである。思うに、この①から④に及ぶ事項は、従来の教員養成課程の中では、特に教育の知識や技術に偏る傾向があったと思う。いわば教育のプロである教員を頭と体を中心訓練してきたということである。しかし、教員は「先生」という敬称で遇されてきた歴史が物語るように、じつは「人間」として尊敬されるべき存在であった。その部分が危ういとの危機感が、ひょっとするとこの事項の中からは窺えるのかも知れない。特に①の「使命感」「責任感」「愛情」等の語は、いわば教員としての知識や技能の背後にある道徳的事項であろう。あるいは②の「社会性」「人間関係力」というのもそれに準じて考えられる。これらはとりわけ教員にのみ必要な事項ではなく、どちらかというと社会を構成する人間全てに当てはめてもよいような一般的な事項のようにも思われるかも知れない。

これを平成22年度からの教職実践演習に入れたことの意味を、このたびの道徳の教科化や新たな学習指導要領や教育要領における「学びに向かう力・人間力等」等と軌を一にした動きだと見る向きもあるかも知れない。これを以て、そこに倫理的な規制を加えることだとか、政治的に偏向していると理解されるかも知らないが、ここではそういう背景論よりも、これを教員の資質・能力の向上に資するの一点に絞って、純粋に教員養成課程を学ぶ学生の教員としての実践力を向上させる一点のみから論じようとした。

文化人類学者のクロード・レヴィ-ストロースは、近代的なシステムチックな一括生産様式に対して、近代以前の個々の工夫によるもの作りを器用仕事（ブリコラージュ）と呼んでその意義を説いたけれども、教員養成課程にマスプロ的な一括押し付け教育は似合わない、少子化の今こそ一人一人の学生の特質を踏まえて、教員養成課程に携わる教員自身が一人一人に工夫をした教育を試みる教職実践演習を創造しようと考えた。いわば本稿は、ブリコラージュとしての教職実践演習を志向するものである。

〈注〉

1) 中央教育審議会の答申 2006年

2) 同上書

3) 同上書